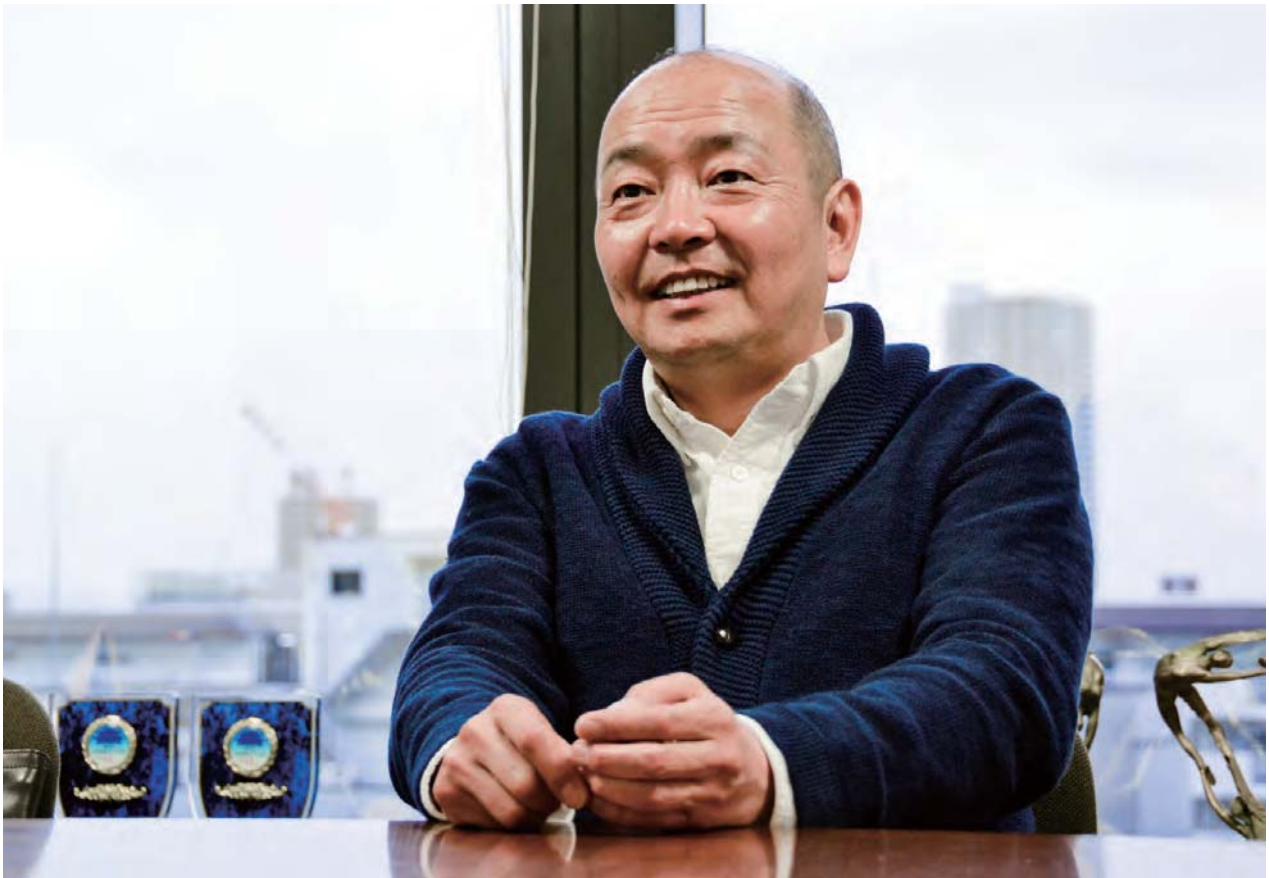


OPINION オピニオン・スライス SLICE

HIROYUKI YAMAMOTO フリーアナウンサー 山本浩之さん



—— 仕事で弁護士とかかわる機会は

長いこと夕方のニュース番組をやっていたので、その取材や疑問点があったら事前に質問したりということはありません。

—— 弁護士のイメージは

24時間動き回ってはるなど。先入観なんですけど、そんなに泥臭い仕事をやる職業じゃないと思ってたんです。裁判に向けた資料を作るために、真剣にゴミ箱をあさったり、物事を確かめるためにいろいろアポをとって、ようやくたどり着く…そこに行くまでむちゃくちゃ大変だと聞いたり。イメージしていたよりもずっと「汗かく仕事」なんやなというのが実感です。

—— 法廷に行かれたことは

取材のために自分で傍聴して、それを夕方のニュースに反映させたことがあります。傍聴した裁判は、尋問が多いですね。尋問の映像があれば、「この人嘘ついて

る」とか「この人の証言って何かおかしいな」とか、映像を通じて分かったりしますよね。でも、日本の法廷にはカメラは入れない。記者の取材メモは「記者が受け取った感覚」であって、ニュースはその又聞きになるし、それでは十分じゃないと感じたので、それなら自分で行ってみよう。

—— キャスターの仕事だけでもおもしろかったのでは

午前中は時間が結構空きますので、自転車で行っていました。ランプハウスのカレーとかよう食べてましたよ。

—— 事件の現場にも行っておられるんですか

私が初めてキャスターになったのが28歳。その当時、他局の6台時のキャスターは、40代以上の人が多かったんです。それまで野球や競馬の仕事が中心だったので、いきなりニュースに行けと言われて、もちろん経験も知識も全て

がない中でで勝負できるかと考えたときに、「現場に行くしかない」と思ったんです。自分の目で見て、肌で感じたことを言葉にすれば、そこには嘘はない。それは視聴者にも響いたのかなと思うんです。そういうニュースのあとは割とお手紙をいただいたりしました。

今だとインターネットにいくらでも情報があり、内容については理解ができますが、どの事件や社会問題も一面的ではないので、現場に出て、違う角度から見たら、全然違うやんということが見えてくるんですよね。そういう意味でも現場は大切にしたいと思ったし、正直若いころはそれしか武器がなかったの。

—— ヤマヒロさんはニュースからバラエティーまで幅広い番組に出演されていますが、番組によって取組み方に違いはありますか。

ありますね。バラエティーを見る人は

笑いたいから見るわけで、そこで、芸人やタレントでないから一步下がるというのは僕はだめなんです。腹の底から笑ってもらうためにはどうしたらいいかということは、テレビマンの一人として真剣に考えたかったので、芸人さんには勝てないですけども、自分が入ることによって笑いやおもしろみが+αされるなら何でもしますというスタンスです。

ニュースの場合は、視聴率のことを考えているとできないので、数字とれへんかってもこれはやると、例えば4月25日に近い1週間は福知山の脱線事故の特集を毎日やろうと。その期間にも視聴率の数字が下がっても、視聴者は「絶対やってくるぞ、関テレは」と思って見てくれてると信じてました。だから、阪神淡路大震災と福知山線の脱線事故と明石の歩道橋事故は、大きな節目では必ず厚めにやっていました。そういうときはバラエティーのことは忘れますね。ニュースはどれだけ信頼を得られるかというところに尽きるとしています。

—— **ニュース番組は、一般社会に大きな影響力を与えることができますが、それを意識されることは**

一番神経を使うところです。その気がなくても結果的に被害者、加害者の人権が損なわれたり、あるいは本人ではなくても、家族、縁者たちに迷惑がかかってしまっていたということもありうるので、最も慎重になるところですね。報道するか否かという判断は、社会的な公益性とか、国民であるニュースを見ている人たちがそれによって大切な情報を得られるんだということについて自分たちの中で確信を持てたら、それは報道せんといかんかと考えます。ただ、もちろん人権についての最大限の配慮はいつもやってきているつもりです。それでも報道せざるを得ないというときはやります。

僕は現場の記者とぶつかることが結構多かったんです。自分も経験があるんですけど、取材に行くと、やっとならぬというインタビューや映像があつて、でも、それを報道しなくてもニュースの本質はちゃんと伝えられることがある。そして、



「やっとならぬ」であってもその映像を出すことによって、被害者や加害者の人権に直接ではなくても影響してしまう映像ならボツでええやろうと僕は考えるタイプです。そこで記者とぶつかってね。何度も言い合いになったことがありました。

—— **視聴者には見えないところで闘っているんですね**

どの仕事もそうでしょうけれども、そういうせめぎ合いができるのは、信頼関係があるからこそですね。カメラマンや記者が「何言うてんねん、ええかっこの言な」と思っているだけであれば喧嘩にもならないです。でも、お互いに理解でき、信頼関係があるから議論を闘わせながら積み上げていけるんですね。報道して100点なんてもちろんないし、欠点結構多いわけですよ。そうすると、次に同じような事例が起きた場合どうするか。それに向けて総括が必要で、それは飲みながらでもいいけど、信頼関係を仲間と共有してやってきたつもりです。

—— **最近では弁護士もマスコミに出ることが増えています。我々がマスコミに出るに当たって注意すべきことはありますか**

法律から離れて一般的な会話をされるときは、本来の持ち味をお出しになったらいいと思いますよ。繕わずに。在阪局でしたら、関西弁で押しいただいたらいいいと思います。

ただ、法律に関することを話されるなら、分かりやすいように例え話がほしいですね。かみ砕いて説明しているようでやっぱり難しい。何かに例えることでさらに分かりやすくしていただけたらいいなと思います。

—— **弁護士に限らず、司法、法曹について感じておられることはありますか**

裁判官には、世の中というのがどういふものなのかというのを一番見てほしいですね。弁護士は、依頼を受けて、実際取材されるところで社会というものにどっぷり接することは可能ですよね。裁判官は…もうちょっと頭柔らかくなれへんのかなと思うときがありますね。社会ってそんなもんじゃいややろうという部分ですよ。

また、裁判員裁判は凶悪犯罪とかに使われますが、そこを何で考えんといかんのやろうと思うんです。それより、国賠訴訟、西淀川公害訴訟みたいな公害問題、そういうのを裁判員裁判させてほしいと思うんです。凶悪犯罪なんてごめんやと思ってる人も結構多いと思います。法曹界全体がもうちょっと社会に目線を下げてきてもらったほうがいいのになと感じます。

あと、今、憲法論議がかまびすしいですが、憲法まで行かなくても民法なども今の時代に即した形のものに変えんことには、社会的背景が今は全然違うのになと思うことがあります。

—— **最後に、今後の展望は**

サラリーマンアナウンサーのときにはできなかったことをやっていきたいです。ラジオでもいいんですけど、1対1のトーク番組とかそういうのはやりたいです。政治家の次は野球選手、次は歌手、弁護士さんが来たりとか、そういう番組はしたいなと思います。

(Interviewer: 蝶野弘治 / Photo: 武田)